

# 「きく」ことの美しさを求めて

——「初等科国語」学習体系の探究——

加藤 宏 文

## はじめに

本学教育学部における「初等科国語」の一つは、「教科に關する科目（小学校）」として、第四期（二年後期）に開設されている。その受講者は、小学校教員養成課程に所属する者のうち、「国語」を主専攻としない者、および、養護学校教員養成課程、幼稚園教員養成課程に所属する者の一部である。担当は、私を入れて二名、私は、うち約半数の九六名を、その受講者として、共に学習を展開した。

講義の内容や方法については、全面的に私自身に任せただけに、私は、右の学習者たちの未来について考えざるを得なかつた。私は、今までの高等学校での国語科教育実践およびその研究を通して、「きく」ことの意義について、折々に考えさせられ、時々を通して、自らの国語教育指導者としての責任の重さをも痛感させられてきた。未だの国語教育の若々しい担い手を前に、私は、右の主題をさらに探究し合いたい思いに駆られた。

しかし、「きく」ことについて、私は、その機能や国語教育における意義について、すでに体系的な学習をしていたわけではない。私は、一つには、学習者たちが、将来その指導の対象とする子どもたちとの接点となる教材の開発、二つには、「きく」ことの原理的な追求の導き手となる先学の論の教材化、三つには、学習者自身が、この学習過程の中で、どのように自らの「きく」態度や力を磨き上げていくかの検証——の三点を、骨子とした。

「きく」ことの学習は、国語科教育の場においてさえ、重視されているとは、言い難い。私たちは、この学習を通して、「きく」ことが、賢しらの「聴」や「騒音語」<sup>社</sup>によって疎外された「聞」やを越え、第三の「きく」として、「つくり（創造）」合うことの必須の条件であることを理解し、それを、学習の中でも実践し、その成果を表現し合うことを目指した。国語科教育の根幹を見据えて、私たちは、「初等科国語」体系をこう探究した。

大村はま氏は、早に、「心を語るひびき」の見出しの下に、次のように説かれて<sup>注2</sup>いる。

○ 国語の学習として、聞くことに関係して、身につけなければならない力がたくさんありますが、その、いちばんもとに、この、ひとのことばのひびきの中に、その人の心を悟るということがあるので。そうして、そういうことのできる人が、ひととの深い交わりを築いていくのだと思います。そして、それこそ、しあわせのもとです。

一方、壺井繁治の詩には、次の一編<sup>注3</sup>がある。

○ 黙<sup>注4</sup>つていても 黙<sup>注4</sup>つていても／考えているのだ／俺が物言わぬからといって／壁と間違えるな

私たちは、なお押し寄せるもの重い国語教室のただ中にあって、「壁と間違え」ている指導者としての自省なしに、大村はま氏の言う「ひびき」を「きい」たことにはならない。どのようにその思いをかき立て、展開するか。

私は、この両極を念頭に、私たちのことばの生活が、「きく」ことにおいて、どのような現実<sup>注4</sup>に甘んじているかを、「大学」の次の一文<sup>注4</sup>を入り口にして考え合うことから始めた。

○ 心不在焉。視而不見。聴而不聞。食而不知其味。

また、岡倉天心の「茶の本」に引用されている「琴」の

逸話<sup>注5</sup>が、私たちの学習意欲を揺さぶったし、何よりも、壺井繁治の詩や小学一年生たちのナイーブな詩<sup>注6</sup>から、「きく」ことの実際について、目を覚まされたのである。

右の第一時の学習を経て、Aさんは、これからの展望と決意のほどを、こう述懐する。

〈Aさんの表現1〉「聴而不聞」。私たちは、聴と聞比べると、聴の方が重きものとして扱えがちである。しかし、「聴而不聞」という言葉に表されているように、実は、聞の方が大切なのである。「聴」は、集中して能動的で分析的であるが、それだけで意味のなさない部分が生じてくる。「聞」というイメージとして、自然に耳に入ってくる音という感じがする。自然ということは重要なことであり、すなわち、日常的な価値を意味する。だが、聴と聞だけでは補えないもう一つのきくというのを、私たちは考えねばならない。教師になる上で、第三のきくというものを、これからの授業で十分深めていきたい。

〈私のひと言〉よく「きく」ことの表現した一時間であったことがわかります。ただし、④と⑤とが、両立して表現されていることの意味を、今一度吟味してみることが必要でありましょう。

このAさんのように、多くの学習者は、多彩な教材によって、「きく」ことの世界の奥深さを垣間見た。それは、確かに、価値学習としての理解の確認であると同時に、理解を



越えた新たな価値の世界の存在をも感じ取り、主題意識をかき立てられていることでもある。私たちは、ここを入りに、次の一覧表に示すような学習体系を、紡ぎ出したのである。

## 二

本学習の小主題の一つは、「きく」ことが、なぜ美を創るのか。である。一覧表中、およそ、第一時から第四時までが、それに当たる。以下、二人の学習者の〈表現〉活動を中心に、学習の過程と成果とを吟味したい。

〈B君の表現1〉「聴而不聞。」では、「聴く」ことよりも「聞く」ことのごとくに重点をおくべきだと言っている。確かに、私たちは、「聞く」ことよりも「聴く」ことに重点を置きがちであり、例えば何かの事故があった時にも、数字を並べる専門家の言うことに重点を置き、世間一般の人の声などは、聞き流す。しかし、その世間一般の人の声にこそ真実が含まれている場合が多くある。聞くということは、簡単なようで難しい行為ではないのか、という気がする。

〈私のひと言〉 ①の「聞」は、②の「聞」とは、似而非なるものですよね。そこをはつきりさせて、今日の学習の第三の「きく」をクローズ・アップさせてほしいところですよ。

〈Cさんの表現1〉 聴くとは、直接音声等により表されたことを感じることであり、聞くとは、その表現から（音声以外のものでも）感じられるものすべてを感じとることである。つまり、聴こえても聞こえないことがあるという意味である。／私は、今、副々専攻で、障害児についての勉強をしている。ここで求められるのが、まさに「きく」ことである。聴いていては、彼らは私達に接してくれない。私達は、彼らに障害があるため、彼らの言いたいことを理解したいがために、「きく」ことを求められた。しかし、これは、彼らに限ったことではない。子どもに限ったことでもない。私達の生活を豊かにしていくためにも、大切な姿勢である。しかし、私もサークル活動などで小さい子どもと接していると、このことの大切さを痛感させられる。

〈私のひと言〉 「感じる」という表現で、今日の学習の問題を説明するわけにはいきませんでしょう。①以下で、貴重な体験の中から区別されている「聴」と「聞」とが、前半の説明にも反映するよう、吟味し直してください。

「大学」の指摘するのは、「聴」の賢しらである。相対的に求められる「聞」は、私たちの日常にとつての「聞」とは、似而非なるものである。私たちは、導かれて、私たちの「聞」を、第三の「きく」として、「大学」言うところの「聞」をもつきぬけて、「創造」の大前提としてのそれに、高めねばならない。

また、星野富弘の詩画集に、次の詩がある。

○ よろこびが集ったよりも／悲しみが集った方が／しあ  
わせに近いような気がする／強いものが集ったよりも／  
弱いものが集った方が／<sup>①</sup>真実に近いような気がする／し  
あわせが集ったよりも／ふしあわせが集った方が／<sup>②</sup>愛に  
近いような気がする

私たちは、各連末行の④・⑤・⑥に、どのような一語が  
入るかを、自由に考え合った。

〈B君の表現3〉 ④ よろこび ⑤ 強いもの ⑥ し  
あわせ——④ 本当のよろこびは、悲しみを重ねたうえ  
で体験してこそ本当のよろこびになるという気がする。  
⑤ 弱いものが集まって団結し進んでいくことが、強いも  
のである。⑥ しあわせは、ふしあわせの中に見出せる  
ような気がする。

〈私のひと言〉 各連の一行目のことばが、それぞれへ  
に入るということとなりますね。しかし、それでは、二  
者択一、どちらがということをやっただけに終わりませ  
んか。越えて、その上に輝くことばをへ へ へ へ へ へ へ  
いところですね。

〈Cさんの表現3〉 ④ 幸福 ⑤ 幸福 ⑥ 幸福  
——とても嬉しいことがあったとき、心の底から喜んだ  
時、その時はとても幸福だが、後には何となく空々しい  
感じが残る。悲しくて仕方がない時、ずっと思い悩んで

いると、いつの間にか、未来に明るいものがみえるよう  
な気がする。／強いものばかりの集団の中にいる時、個々  
の人間は、わずかばかりの安堵感を覚える。弱いものが  
集まった集団の中にいる時、個々の人間は、自分の力を  
最大限に発揮しようとする。／しあわせな時よりも、ふし  
あわせなときの方が、人間は力強く生きることができ  
る。内側はより美しく輝いている。

〈私のひと言〉 いずれも「幸福」という発想そのものは、  
星野さんの場合に通底していますよね。しかし、それを、  
各一行目二行目では、ちがった入り口から追求している  
のですから、三行目も、何とか表現し分けたいものでは  
④はそのままにするとして、⑤・⑥は、「幸福」の質をど  
う弁別しますか。

私たちが求めている第三の「きく」は、分析的な賢しら  
の意図によつて独善に陥る「聴」でもなければ、「騒音語」  
の渦中に我を忘れて、「聞き」流すことを常とする「聞」で  
もない。「大学」の言う「聞」を前提として、さらには、そ  
こから、他者に向かつて、他者とともに価値ある世界を創  
造することのできる場としての「きく」でなければならな  
い。〈表現3〉は、星野富弘の詩の核心をどのように「きく」  
かが、とりもなおさず、自らのどのような〈表現〉（創造）  
となるかである。

この学習は、必ずしも、星野富弘の表現に一致すること  
を求めるのではない。もしそれに近ければ、もしそれに遠

ければ、いずれの場合も、その具体的な相対関係の中に、自らの「きく」が、第三の「きく」として、どのような位置にあるのかを自覚する。さらには、学習者同士お互いの「創造」を比較し合うことよって、「きく」活動は、さらに豊かな「創造」へと、それぞれの成果を反省させ、自覚させ、小主題の目標へと立ち向かわせる。

### 三

次に、本学習の小主題の二つは、「ことば」として『沈黙』とは何か。」である。私たちは、マックス・ピカートの『沈黙の世界』<sup>註1</sup>の警句に多くのことを学び、その上で、たとえば、茨木のり子の詩集『寸志』中の一編「聴く力」<sup>註2</sup>に、揺さぶられ、理解を確かめる。

○ 聴く力　ひとのこころの湖水／その深浅に／立ちどまり耳を澄ます／ということがない／風の音に驚いたり／鳥の声に惚けたり／ひとり耳そばだてる／そんなしぐさからも遠ざかるばかり／小鳥の会話がわかつたせいで／古い樹木の難儀を救い／きれいな娘の病気まで直した民話／「聴耳頭布」を持っていた　うからやから／その末裔は我がことのみは無我夢中／舌ばかりほの赤くくると空転し／どう言いくるめようか／どう圧倒してやるか／だが／どうして言葉たり得よう／他のものをじつと／受けとめる力がなければ

私たちは、この詩から、「聴耳頭布」のように、神様から「沈黙」との接点を持つことを許されるか。そのためには、<sup>①</sup>によつて、初めて、<sup>②</sup>としての「創造」があるを識る。

そこで、私たちは、どう「受けとめる」か。次の一首に「きく」ことで、理解を深める。

○ 地下鉄の階段を二つずつのぼる君

「早くおいでよ！」我は唯樂し

〈B君の表現6〉　デートの時、男が地下鉄の階段を二段ずつ昇つていって、一段ずつ昇つていく作者（女）に「早くおいでよ！」と声をかけている。その声をきいて作者は喜んでいる。／男は階段を早く昇つていくことにより、女との間の沈黙の空間は拡大され、そのことにより、男、女とも、心の中に不安・孤独という要素ははいりこむ。<sup>③</sup>男のほうは、さっさと階段を昇りながら、「このまま女の子がついてこなかったらどうしよう。」と考え、女のほうも、「このまま男が私をおいていったらどうしよう。」と考えるのである。／ところが、その場面で階段を昇りきつた男が、<sup>④</sup>「早くおいでよ！」ということにより、<sup>⑤</sup>共生感が生じ、お互いにそれ以上の言葉はなくても、「あなたにそばにいてほしい。」といった気持ちのつながりが生じるのだと思う。いわば、「早くおいでよ！」という言葉は、沈黙を補強する言葉のように思う。

〈私のひと言〉 ④が、⑩ということばによって、初めて  
⑩になるのでは、二人の間は、やや心細くはありません  
か。突然二段ずつのぼり始めた瞬間、すでに「女心」は、  
その「男心」を理解しています。

〈Cさんの表現6〉 階段を二つずつ上つていく男の子。  
女の子ではなかなかそうもできないでしょう。それでい  
て、先にスイスイ上がっていき、「早くおいでよ！」とせ  
かしているのです。もしこれが逆の状況だったら、「我」  
はたのしいはずがありません。「我」は「君」が二つずつ  
上つていくのを見て、「君」も楽しいから、わざとそのよ  
うにしているという内のことばをきいているのです。

「君」も「早くおいでよ！」と言いながらも、我に對し  
て本当に「自分に遅れずについてこい。」と言っているの  
ではなく、待っているから、ゆつくり上がつておいで、  
という意が含まれており、これが「共生感」を共有して  
いるのだと思います。だから「早くおいでよ！」とこの  
気持ちと共有していることを確認することができるよう  
なことをきいて、我は、ますますたのしくなつてしま  
うのでしょうか。／この音声にならない内のことば「沈黙」  
があるために、二人のたのしい関係が保たれているので  
はないでしょうか。

〈私のひと言〉 ④・⑩に、微妙な男心があることに、さ  
すがに気づいていますね。さらには、「二段ずつ」という  
突然の、「一見衝動的な男の行為が、④や⑩やよりも、もっ

と不条理な、それでいて美しい「男心」の表出(表現以  
前の)であることに、気づいてほしいところです。

私たちは、先立って、詩人・まどみちお作「ケムシ」を  
教材とした。こんな詩である。

○ケムシ さんばつは さらい

さて、いわばかぎりなく「沈黙」に近いこの一編の詩に、  
私たちは、何を「きく」か。ちなみに、まどみちおには、  
こんな詩もある。

○蚊 蚊も亦たさびしいのだ。／螫しもなんにもせん  
で、／眉毛などのある面を、／しづかに触りに来るのがあ  
る。

「けむし」に比べて、「蚊」には、作者と対象(蚊)との  
間に、大きな距離があつて、まだ人間としての目や耳やに  
こだわっている。それに比べて、「けむし」は、対象の孤独  
と一体になつてゐる。そこに、初めて生まれるのが、さき  
の「共生感」であり、そこからこそ切実な対話が、「けむし」  
との間に成り立つのである。この「沈黙」にかぎりなく近  
い一編の詩は、まどみちおにおける第三の「きく」が、「け  
むし」との間に成つた証である。

B君とCさんとは、ここで学んだ「共生感」を「理解」  
した上で、それを「表現」語彙にまで高めることができ  
ている。このことは、とりもなおさず、一首の短歌表現を対  
象にして、第三の「きく」の具体を成した証である。

また、その「理解」の段階では、一首中の「我」と「君」

との間で、「沈黙」の重い存在を通して、第三の「きく」が、美しく成り立っていることにも注目することができている。これが、「表現」(創造)を支えている。

私たちは、「きく」ことの美しさを求めて、まずは、国語教室に、右の謂での「沈黙」を蘇らせねばならない。そのためには、まずは、右のような学習者に対し、指導者が、「きく」に足る「はなし」を、提示できねばならない。

その意味で、私は、この学習体系をさらに充実させるためにも、「きく」ことや「沈黙」にかかわって、古今東西を問わず、言及している先学のことばを博搜し、教材開発に努めつつ、学習の方法をも開拓せねばならない。

#### 四

さらに、本学習の小主題はの三は、「第四の『きく』は、現代に生きるか。」である。中で、私たちは、唐木順三氏が提起しつづけてきた「近代が放棄したきく」に焦点を当てる。氏の批判は、次の二点に向けられる。すなわち、① 自我の確立、② 一切の対象化——こそが、それだとする。氏は、その上で、自己否定を前提とした「きく」によって成り立つ文化や文明への視点を、喚起している。

さらに、私達は、良寛禪師の次の詩に、「きく」ことへの一層の深みをも、教えられた。

○ 千峰雨霽露光冷 月落松根羅屋前

擬写等閑此時意 一溪雲鎖水潺々

ここには、「きい」たものには、「等閑」(ついうっかり)には、外に出すべきではない、出したとたんに、その真実の世界は、消えてしまう、というのである。この、一見消極の価値は、近代を超えるべき現代の状況の中で、果たして有効に生きる精神であろうか。

その上で、私たちは、小学四年生の教材、岡野蕉子作「冬の道」の朗読(加藤)に「きき」ひたり、小学四年生といっしょに考えたいことを、記述する。「きい」たものが、子どもたちの心に、どう「つながる」かである。

〈B君の表現9〉正吉は、少女について、「一言も口を開かなかつたのに、長い間話していた心持ちがしました」と感じている。これは、冬の道を歩いて、夜空、またたく星等の自然と沈黙のうえでの会話をかわしていたので、自然の一部、という形で現れた少女とも長い間話していた気がしたのだと思う。

〈私のひと言〉 具体的な表現をびたりと押さえての記述に敬意を表します。④を、正吉君は、目を閉じて、再現することに成功しましたね。自らの内なる声に耳を澄ますことよって、少女との接点を「つくる」ことができただのですよね。

〈Cさんの表現9〉「正吉は、目を開けませんでした。」正吉は、ただ自分の手の上に星が降りてくることを考えていました。星は、どんどん降りてきました。正吉は、

しあわせでした。頭の中には、きれいな星がいっぱい浮かべていて、青白い光を放っている。そんな姿を思い浮かべています。正吉は、とてもしあわせでした。／＼風がふいて、「正吉は、パツと目を開きました。」すると、星は、次々と空へ舞い上がってしまいました。正吉は、黒い自分の影しか見ることができませんでした。正吉の思いがふつと自分にかえって、瞬間に、美しいものは見えなくなり、しあわせも飛んでいってしまつたのでした。

〈私のひと言〉 ④が⑤につながるころに、一つの大事な寓意が込められているのではないでしょうか。目を閉じることによって、自らの内なる声を聞くことを、私たちは、この文明の中で、恐れていますよね。第三の「きく」は、このことと、どのように通底しているでしょうか。

さらに、私たちは、小学六年生の教材、杉谷みき子作「加代の四季」にも「きき」ひたる。その結末に、④ 加代ちゃんの見たかったものを表現し、⑤ 加代ちゃんの疑問にも答える形で、表現を試み、理解を一層深める。

〈B君の表現10〉 ④ 雪の心 ⑤ 加代ちゃん、はじめに降っている雪は、解けて消えてしまつて見えるように見えるけど、地面の上で水となつて、それがひやされて氷となつて、目には見えないけど、後から振りてくる雪の仲間たちをしっかりと受ける土台となつていんだよ。

雪はね、地面を自分たちの仲間であつていよう

思つて、たとえ自分が解けても、仲間のために土台となつてがんばつていんだよ。そうした積み重ねによつて、はじめて、朝起きたとき、雪の仲間であつた世界が作られているんだ。例えば目に見えなくとも、小さな積み重ねをしていくと、きつといい結果が出るんだよ。

〈私のひと言〉 (1)に、加代ちゃんとの接点がありますね。加代ちゃんは、「ぴしゃぴしゃ」から「積る」への変質の境目の一瞬に、パイオニアとなつたひとひらの雪片が存在するはず、それを見たい、と思つているのですよ。

〈Cさんの表現10〉 ④ 雪のかたまり 大きな雪 ⑤ 加代ちゃん、雪はね、とつても冷たいでしょ。でも、地面はあたたかいのよ。だから、はじめにふつてきた雪が、地面を少しづつ冷たくしていくの。たくさんふつたらそのうちふつても雪がとけなくらい冷たくなって、あとにふつてきた雪は、もう消えないのよ。／＼今はね、雪があつていづつばいづつもあるための準備をしているのよ。自分とはとけるけどね。あとからふつてくる雪がとけないようにがんばつていんだよ。

〈私のひと言〉 呼びかけのトーンに、心が込められていますね。加代ちゃんは、「ぴしゃぴしゃ」が、あんなにつづくのに、どの一瞬からが、「積る」という異質な現象になるのか、その境目になる一片の雪は、どのようなものなのかと、そこに注目しているのです。

自らの内的世界をも含めて、対象に「きき」ひたる行為の目標には、無限の奥深さが求められる。良寛禪師は、この「きく」が表出されること自体をも、一見否定しているかに見える。しかし、それは、右の奥深さへの謙虚な思いの然らしめるところ、言うまでもない。

私たちは、あだやおろそかに表現することの愚かさに思いを潜めつつも、なお、現代の状況の中では、この第四の「きく」をつき抜けて、対話をはじめとした「つくり」合う世界へと、それを昇華させなければならぬ。

右の二つの学習は、その原理を、具体的な小学校教材に「きき」ひたることの実践の中で、表現し、その有効性を確かめたのである。

### おわりに

私たちは、この学習を通して、①「きく」ことは、「つくる」ことの礎である。②「きく」ことは、「沈黙」とこそ、深くかかわっている。③現代の状況の中でこそ、「きく」ことが、切実に求められる。——と学んだ。

学習者たちは、第一一時、「試験」の場で、この学習で最も考えたことを、こう記述する。

○ みんなの今の生活は、大事なことを聞き落としていることがいっぱいあると思います。そんな中で、先生は、きくことの美しさを求める心を教えて下さいました。友

達、子ども、自分の周りのすべての人のこえを大事にしたいと思いました。こえが音として出ないものにも、耳をかたむけようと思いました。この講義を受けて一番感動したのは、提出したプリントの先生の赤ペンです。先生はあたりまえのようにやられました。正直いって驚いてしまいました。先生が受講者のこえをきいてくれているようで、うれしく思いました。私も、先生のような教師になりたいと思いました。

○ きくことについて学んできたわけですが、その中で最も考えさせられたことは、沈黙です。今まで、沈黙とはただ黙っていることだと思っていました。しかし、沈黙には、もつと根深いものが潜んでいたのです。騒音語を排除するという消極的なものではなく、沈黙は、相手にはきだそうとする言葉を育む母体となる積極的意味をもつものだったのです。／それを知った後の私の日常生活も少し変わったものとなりました。また沈黙は、教師が生徒をいかに引き出すか、という作用も持っていると思います。／最後に、毎日何かを得られる講義をしていただきありがとうございます。先生の話は奥深く、いつも考えさせられました。これからの糧にしていきたいと思えます。

○ 初等科国語の授業を受講した後、必ずと言ってよいほど、やさしい気持ちになれます。何がそうさせるのかはわかりませんが、*“ふんわり”*と包まれたような温い気持

ちになるのです。教師にとつて、女性にとつて、最も大切なものを与えられ、得られるようです。日常生活が騒音に囲まれ、邪道と言つてもよい生活であるので、なおさらのことなのかもしれません。先生の話しをきき、自分で感じ、考える授業つて本当に少ないから。／それから、この講義では、子ども達にきく、子ども達ときく、という重要なことを学び、考えました。短い間でしたが、ありがとうございました。春休みは、本を読もうと決めています。

このような述懐を前にすると、「初等科国語」として、学習者たちが求めていたものが、何であつたのか、と同時に、さらに、何でなければならなかつたのが、省みられる。それぞれ指導者としての専門の課程に分け入ろうとする学習者とともに、私は、さらに「きく」ことの美しさを求めて「精進をしたい。

- 注1 マックス・ピカート著・佐野利勝訳「沈黙の世界」  
 (みすず書房刊)
- 2 「大村はま国語教室」③所収「やさしい国語教室」  
 中々よく聞こう 一一ページ(筑摩書房刊)
- 3 「日本詩人全集」25「壺井繁治他」(新潮社刊) 所収  
 「漢文大系」第一卷「大学」(富山房刊) による。
- 5 「岡倉天心集」所収「茶の本」第五章「芸術鑑賞」  
 中、伯牙の「琴馴らし」(明治文学全集38 筑摩書房刊)

- 6 「名作版 日本の児童文学」鹿島和夫編「二年一組  
 せいせいあのね」(理論社刊) 他
- 7 星野富弘「愛、深き淵より」(立風書房刊) 所収の詩
- 8 「茨木のり子詩集」(現代詩文庫) 20 思潮社刊) 所収
- 9 中村とも子「昔話「聞き耳頭布」を考える」(山田宗  
 睦編「耳は何のためにあるか」風人社刊 所収)
- 10 浜村潮の作品(一九七八・三・二三付朝日歌壇掲載)
- 11 谷悦子「まど・みちお 詩と童謡」(創元社刊) に、  
 まどみちおの特質が、このことばで説かれている。
- 12 「国語四下」「はばたき」(光村図書) 所収教材
- 13 「唐木順三全集」第九卷「聞くことの重要さ」(筑摩  
 書房刊)
- 14 東郷豊治編「良寛全集」(東京創元社刊) (注13の同  
 一三卷「良寛における「聞く」に引用 説かれている。)
- 15 「新訂小学国語4下」(教育出版) 所収教材
- 16 「新訂小学国語6上」(教育出版) 所収教材  
 (二九九一・二・二五記) (山口大学)